

## ヌエボ・チュピクアロ村

—米国移住にみる村の放棄と繁栄のパラドックス。メキシコ，グアナフアト州—

増山久美

### 【凡例】

1. 本稿の原著は Sam Quinones 著 *True tales from another Mexico* (The University of New Mexico Press, 2001) のスペイン語版 *Historias verdaderas del Otro México* (Editorial Planeta Mexicana, 2002) の 329-340 ページ, Nuevo Chupícuaro である。副題は日本人読者のために訳者がつけた。
2. 文中の〈 〉内に示された部分は訳者の補注である。また、番号つき注は、訳者が読者のために補足説明したものである。
3. 本文中の [ ] には [ ] を, ( ) には ( ) をそのまま用いた。
4. 邦訳に際して、固有名詞・地名は原則として現地音に従った。

1965年のことである。ヌエボ・チュピクアロ村〈メキシコ中央高原に位置するグアナフアト州の小村〉では村中の人たちが、サン・ペドロ通りとタラスコ通りの交差するかどにたたずんだ。そこではボニファシオ・カバジェロが2階建ての自宅を建てていた。その家のてっぺんには骨組みの鉄棒がアンテナのように何本も突き出ており、壁には窓穴が開けてあった。「巨大な鳩小屋みたいだ、と人々が言っていたものだよ」と、カバジェロは言う。

しかし、村のみんなは仰天していた。彼らは、自分たちのように貧農だった男がそのような立派な家を所有するなど想像だにできなかった。

カバジェロの家は、ヌエボ・チュピクアロ村で初めての2階建て家屋だった。建築には1万1千ドルを費やした。それはカバジェロがカリフォルニ

ア州で日雇人夫として働いて稼いだ金だった。家には現在7つの寝室と、食堂、居間、2世帯用の台所、それに2つの浴室がある。それらすべてが野良仕事をしている男のものだ。

「俺はいつも貧乏のどん底にいたよ。大きな家を持ちたかった。息子たちに何がしかのものを残してやりたかったんだ」と、カリフォルニア州ベーカーズフィールド近郊ワスコで今なお日雇人夫として働く、白髪混じりの濃い髪に髭をはやした57歳のカバジェロは言う。

アメリカ合衆国で彼の子どもたちは特筆に値するほど成功している。長女はNASAが委託している会社で宇宙ロケットのデザインを分析している。レストランの支配人を務める息子は、まもなくマイスターの称号をとる。彼はチカーノ<sup>(1)</sup> 演劇やジャック・ケルアック<sup>(2)</sup> に精通している。次女は幼稚園で保育士をしており、末娘は高校の成績がすべて10〈10段階評価の最高得点〉で、ワスコの高等学校連合会の役員を担っている。「このどれもがメキシコでは不可能だったろうよ」と言う。「俺はすべてアメリカ合衆国から恩恵を受けている。子どもたちもさ」

しかしボニファシオ・カバジェロは、つねに自分自身をメキシコ人だとみなしてきた。だから何よりも、彼らはヌエボ・チュピクアロ村の豪華な2階建ての自宅を1年のうち11ヶ月間留守にしているのに、〈1年のほとんどを過ごす〉ワスコでは野良中の小さな借家で暮らしているのだ。もうじき彼と妻は引退する。「チュピクアロ村は素晴らしいところだ。チュピクアロ村に戻ると生活が落ち着くよ。俺は満足している。幸せだ」と言う。

彼にとってメキシコはいつでも故郷〈ふるさと〉なのだろう。ボニファシオ・カバジェロは、故郷や家をもつ意味を考える人間の試論である。国

---

(1) 基本的に、アメリカ合衆国に住むメキシコ系住民のことを指して「チカーノ」という語が用いられる。

(2) ジャック・ケルアック (Jack Kerouac: 1922年-1969年) はアメリカ合衆国の作家で、ビート世代 (ビート・ジェネレーション) を代表する人物の一人。『路上』『孤独な旅人』などの著作がある。作品の多くは、コロンビア大学を中退して以来の放浪と遍歴の生活をそのまま下敷きにしたもの。

境が消滅しているこのグローバル化時代に、彼の人生はこれまでになく際立ったものとなっている。彼と移住仲間は、いつも帰郷を考えてその生涯を外国の地で働いて過ごしてきた。彼らはその思いを胸に人生を送り、アメリカ合衆国ではなく彼らの村にアメリカンドリームを実現した。

ボニファシオ・カバジェロが建てた家は、建築ブームの引き金となった。それはメキシコ中央部に位置するグアナフアト州の、以前は寒村だったヌエボ・チュピクアロ村を変えた。アメリカ合衆国に移住していた他の人たちは、ドルを携えて帰郷すると彼に倣った。彼らはアメリカ合衆国では借家暮らしをして、メキシコに自宅を建てた。かなり前から村の多くの家には噴水や幻想的な中庭やサンルーフが造られるようになり、豪華さと費用の面でカバジェロの自宅を凌いでいた。いくつかの家にはまるでメキシコらしからぬ遊歩道と入り口があり、まるでカリフォルニア州の郊外から抜け出して迷い込んだ家のようなのである。

村は現在、カリフォルニア州の経済に依存している。ほぼすべての家庭に電話があるが、チュピクアロ村の番号は電話帳の1ページを埋めつくすほどで、その規模のメキシコの村としては目を見張る多さである。それはドルだけが可能にしてくれる。

村は、アメリカ合衆国への移住を軸に、1年の生活周期が組まれてきた。12月から見ていくとしよう。移住者たちが帰郷すると、通常千人のチュピクアロ村の人口が3倍に膨れ上がる。村の守護聖人サン・ペドロの正式な祭りは6月29日なのだが、チュピクアロ村はみんなが参加できるように12月29日にもっと盛大なその聖人の祝祭を行う<sup>(3)</sup>。それが終わり1月になると彼らは移住先へ戻っていく。移住者たちの財政が回復して再び村に送金されるまでの数ヶ月間は村の商売が低迷するのだ。概ねそのようにして12月まで生活が続く。村の金融機関は女性たちに口座を開設している。彼女たちの夫は12月になると、挨拶がてら5千ドルやもっと高額な金を

---

(3) ラテンアメリカでは、ローマ・カトリック教の影響力が強く、聖人祭が数多い。とくに各市町村の守護聖人祭は盛大に挙行される（『ラテンアメリカを知る事典』）。

一度にまとめて入金しにやってくるだろう。

村には幼稚園，村営墓地，村営水道局，下水施設，医院，村所有のゴミ収集車があり，村中の通りは大方舗装されている。村営博物館もある。それらすべては，ボニファシオ・カバジェロのように，いつの日か永住のために帰郷することを切望していた移住者たちのドルで支払われた。「一部の施設は〔俺たちが企画した〕というのは，俺たちはあちら〔アメリカ合衆国〕の生活に慣れているから」と，カリフォルニア州，モデストの畑で働いたフランシスコ・アギラルは言う。彼はその預金で，建築資材の商売をチュピクアロ村で始めた。その商売はいま繁盛している。

私がチュピクアロ村を訪問したのは，メキシコからアメリカ合衆国への移民を理解しようとしていたからである。その調査の一環としてボニファシオ・カバジェロに会ったわけだが，私たちはワスコの野良に建つ彼の借家の外で夕食を共にした。夏の黄昏時，私たちは移住やメキシコ，ワスコの政治，アメリカ合衆国，チュピクアロ村の歴史，彼の2階建ての自宅のことを話した。

しかし，彼との夕食へと私を導いた行程や数々の質問事項は，4年以上も前，私がメキシコで生活を始めた時にすでにスタートしていた。メキシコに到着して私が初めて実行したことは，ミチョアカン州に隣接する州のハリポ村の訪問だった。その村は，動物に犁を引かせて畑を耕す初期の農耕だけで生計を立てているように思われた。産業もなければ経済を維持できるようなものも何もなかった。しかしハリポ村には美しい家々があった。それらの家の床には大理石が敷き詰められ，大型車両用ガレージがあり，窓には飾り鉄格子がついていた。私の友人は，それらの家はすべてアメリカ合衆国へ移住した人たちのものなのだ，と言った。彼は，近くに建っているアドベ〈日干し煉瓦〉製で土間の床に厠の家を私に示した。アメリカ合衆国へ行く前は村のみんながこのような家で暮らしていた，と言った。アメリカ合衆国ともドルとも縁がなく，未だにメキシコの片田舎にいる人々はそういう暮らしなのである。それから彼はさらに，建築中の家を私

に見せた。家主たちは、帰郷する12月と1月しか建築作業を行わないので、それらの家が完成するには何年もかかるだろう。私はハリボ村を歩いて気づいたのだが、建造物そのものがさまざまな方法——それらの方法によるアメリカ合衆国への移住が、メキシコを変えてきた——を明示している。

数日後、私は、ミチョアカン州サモラ市にあるコレヒオ・デ・ミチョアカン〈ミチョアカン大学院大学〉で移住の研究をしているグスターボ・ロペス・カストロ教授と話した。「それらの村落にもっとも共通して見られることですよ」と彼は私に言った。「最初の投資は村の自宅にするのです。彼らは〔アメリカ合衆国で〕成功したことを示さなければなりません」

歳月が流れ、私は、アメリカ合衆国への出稼ぎがすでに伝統になっているいくつかの小村を訪れた。各村が、アメリカ合衆国の聞きなれないある村で集中して生まれた息子たちのネットワークを持っていた。ミチョアカン州トトラン村の村人の半分はカリフォルニア州グレンデルで暮らしている。ハリボ村民の多くはカリフォルニア州ストックトンで暮らしている。グアナフアト州オカンボ村はテキサス州ダラスにネットワークをもつ。ミチョアカン州ツインツインツァンの村民の多くは、ワシントン州タコマで働くかアラスカの漁船で働いている。

チュピクアロ村の場合は、村で生まれ育った多くの者が、カリフォルニア州の中央渓谷に位置するグリーンフィールドで生活している。これは今は亡きホセ・ロペスの功労にことごとく拠っている。ロペスは、入国許可証を持つ日雇い人夫だったが、マイク・リードという名の経営者の農場で1959年に仕事をみつけた。リードは彼の仕事ぶりに感銘を受けて、彼のように一生懸命働く男たちを他にも知らないかと、彼に尋ねた。リードは60以上もの入国許可証を入手できた。ロペスは村に戻ると、人々に仕事を約束した。しかし入国許可証を携えた移民局のメキシコ人職員が現れるまで、みんなは彼が気がふれていると思った。ロペスと息子たちは働き手と契約を結ぶ仲介をもうやめたが、彼らはチュピクアロ村からグリー

ンフィールドの経済へと、コンスタントな日雇い人夫の道を拓いたのだ。

私はそれらの村を訪問する際に、家々に特別な関心を払った。ロベス・カストロ教授が言うように、実際その類の家はいたるところで見受けられることが分かった。ハリスコ州、ミチョアカン州、グアナフアト州などのようなメキシコの中央部に位置する諸州の村々は、冒険好きの息子たちの弛み無い努力が散りばめられている。私は、噴水やピリヤード、車2台分のガレージ、丸天井、螺旋階段、エメラルド色の遊歩道、何キロにも及ぶ装飾の施された鉄柵、そして無数のパラボラアンテナの背後に落日を見た。それらすべてはメキシコを去って農夫になった人たちのものだ。

移住者たちが村に投資している金は、おそらく北米の民間資金による都市改造の一大プロジェクトを構成しているだろう。メキシコ政府は、移住者たちが年間約50億ドルをメキシコに送金しているの見積もっている。計算するのは不可能だが、その大部分は彼らの家の建築に費やされる。

しかし、もっとも衝撃的だったのは、それらの家に人が住むのは12月と1月だけということだ。文字通り1年の大半はほとんどそれらのすばらしい家に人気が無い。その間、家主たちはカリフォルニア州オレンジ郡で庭の手入れをしたり、シカゴのホテルやレストランの駐車場係りをしたり、ノースカロライナでタバコの葉摘みをしたりして働いているのである。

それは、私がそれらの家に興味を持ったもう一つの理由である。メキシコからアメリカ合衆国への移民だけではなく、一般論として移民について言えることではないかと私は思う。

ともすれば我々アメリカ人は、移民はアメリカ合衆国にやってきて、新しい生活を送り、帰化することを夢見ているのだと考えたがる。しかしメキシコ人移住者たちの家は、正確にはそうではないということを私たちに語っているようにみえる。それらの家は、経済的發展を求めていく移民たちにとって、真のアメリカンドリームとは、稼いで帰郷して友人や家族——彼らもアメリカ合衆国で稼いだ——にそれを誇示することなのだ、という確かな証拠となっている。当然のことだ。成功したら誰だって高校の

同窓会に参加したいだろう。

1世紀前のヨーロッパからの移民は、それほど頻繁に帰郷しなかったが、私は、彼らが強く望まなかったからだとは思わない。戦争や当時の交通事情や費用など他の要因に関わるのだ。父の話によれば、スペイン人の祖父はペンシルベニア州アレンタウンの炭鉱とビール屋で働くためにガリシアの村を後にした。しかしながら、彼は金を懐にして帰郷することをいつも夢見ていたという。結局夢は叶わなかった。地理的距離、旅費、不況、スペイン内戦、第2次世界大戦に阻まれてしまったのだ。

思うに、移民にとって真のアメリカ市民になるという理想、もしその理想があるなら、それは副次的なことなのだ。メキシコ移民の多くが市民権を取得するのは、たんにカリフォルニア州第187号決議案（投票で承認されたが、不法移民への教育や健康診断などのサービスを拒否してきたと思われる裁判官によって否決された）についての国家の見解を危惧しているからである。

メキシコ人は、飛行機のファーストクラスで帰郷できるという移民のアメリカンドリームを実現できた数少ない集団の1つである。アメリカ合衆国へ大勢の移民を送り出している中国、ベトナム、イタリア、ロシアやその他の国々と比べて、メキシコは政治的平和と貧困を地理的な近さと結合させた。ドルを持つメキシコ人にとっての帰郷は、常に速く確実に実現できて比較的安価である。他国の移民と対照的に、メキシコ人は一度も郷里との結びつきを断ち切るような精神的な苦痛を味わう必要がなかった。しかしながらそれが必ずしも良いことだとは思わない。というのは沢山のメキシコ人家族は2つの家を維持できないでいるのだ。アメリカ合衆国でよくあることだが、彼らは貯金して豪華な家——それらはメキシコの地で使われずに空き家になっている——を建てるために、犯罪が多発し麻薬が溢れ学校が劣悪なバリオ〈ラテンアメリカ系移民が暮らす貧困地区〉で小さな借家に暮らしているのだ。

たとえそうだとしても、この投資はメキシコの経済危機を救っている。

もし移住者たちが村との結びつきを断ち切っていたら、何年も前に沢山の村が消滅していたことだろう。その代わりメキシコの農村はパラドックス、つまり放棄されてはいるが繁栄しているという逆説的な状況に置かれている。それらの家は巨大な考古学の遺物のようにそそり立っている。家族が存在したという明白な事実だ。不思議なことにそれらの家は、生き延びるために村を去らざるを得なかった家族の証拠であると同時に、彼らが帰郷を約束している証拠でもある。

そのように毎年冬になると、短期間とはいえ、じつに多くのメキシコ移民が帰郷する。グアナファト州だけで年間 20 万人が戻るのだ。盛大な祭りを催したり、旧友に会ったり、結婚式を執り行ったり、子どもの洗礼式を行ったり、家の建築作業を進めたりするのだ。よくあることだが、移住者たちは村の高名な雇用者でもある。彼らもまたメキシコの安い労働力を利用する術を知っている。

チュピクアロ村はそういった村の 1 つである。非凡で特殊な歴史があるにせよ、本質的には放棄されながらも繁栄しているメキシコの多数の村との相異はない。

私は初めてホセ・エルナンデスからチュピクアロ村のことを聞いた。彼は州政府の事務所の所長で、外国にあるグアナファト州出身者コミュニティに注目している。私たちがメキシコの移住者たちの自宅のことを話しているとき、彼はその村を話題に挙げた。彼はチュピクアロ村の歴史を語ってくれた。何年も前に、州政府がダムを建設するため村を移設した。エンジニアたちが掘削を始めると、村の下から昔の先住民文化の遺跡が見つかった。工事は中断された。その後、考古学者たちは陶磁器や 400 もの人骨を発見した。少なくとも紀元前 400 年頃には人々がチュピクアロ村に居住していたのだ。それは世紀の大発見だった。チュピクアロ村のもっとも貴重な遺物は、イスラエル、ロサンゼルス、シカゴ、メキシコシティの博物館に展示されている。

しかしながらダムの建設に歯止めはかからず、1949 年に村は水底に沈ん

だ。アドベの家々は、その土中に埋蔵されていると推測される沢山の遺物とともにダムの中に消えた。村民は、そこから僅か数キロの場所に州政府が建てた粗末な煉瓦の家に移住させられた。村にはヌエボ・チャピクアロという新しい名前がつけられた。しかしその土地が乾燥して肥沃ではないことが判明すると、チュピクアロ村の人々は州政府に激怒したと、エルナンデスは言った。彼らはアメリカ合衆国、カリフォルニア州中部の渓谷にあるワスコヤグリーンフィールドへ移住せざるを得なかったのだ。ドルを稼ぐにつれて、彼らはチュピクアロ村に自宅を建てに戻ってきた。「今見られるそれらのカリフォルニア風の豪華な家々は、20万ドルは下らないと思いますよ」とエルナンデスは私に言った。「彼らがどのくらいそこに住むか知っていますか？ 年間2、3日ですよ」

実際、チュピクアロ村の大多数の人々は、年に数週間その家で過ごすだけだ。いやもっと短期間かもしれない。しかし私には好奇心があった。チュピクアロ村には紀元前に村人の祖先が居住していた。村はアメリカ合衆国への移住によって、近代的な輝く村として生まれ変わるべく再建された。その住人たちはまるで通りを横断する人のごとく容易に国境を越えている。そこを訪れる価値があるように思われた。

ヌエボ・チャピクアロ村は、メキシコシティから約4時間の、グアナフアト州南部アカンバロ市から3キロのところに位置する、モロコシ畑で一面覆われたエメラルド色の渓谷の高台にある。村に入って最初に気づくことは、アメリカ合衆国の影響である。教会の屋根についていうと、統一性の無いデザインの、とても有名な不和の塔が聳えている。教会建築の資金は、60年代に帰郷していた移住者たちが寄付した。そのプロジェクトの主催者は、ある人夫頭と契約を結んだ。この人が最初の2つの塔を建てたのだが、やがてこの人夫頭と主催者の娘婿はデザインについて口論を始めた。結局、主催者は人夫頭を解雇した。娘婿は、先が細く尖り、月面探査ロケット「アポロ」を模った（60年代末の風潮）3つ目の塔を建てた（内部の祭壇は、当時カリフォルニア州モデストで暮らしていて、州の宝くじを当て

たある男性の寄付で後に造られた)。

教会の前には、移住者たちが寄付したドルでほんの数年前に改築された広場がある。そこには2つの可動式ステージと、ベンチ、噴水、枝葉の茂った木立がある。そこから1ブロック先に位置する村営博物館には、チュピクアロ村の文化的遺物が古代のものから近代のものまで展示されている。

移民が毎年帰郷することは、チュピクアロ村の経済を維持するうえに、村の発展にいっそう拍車をかける社会的競争を促進してきた。教会、道路、博物館、家屋、広場、すべては、過去の貧困の最後の足跡まで消し去りたい、アメリカ合衆国で収めた成功を見せることで互いに向上したい、という移住者たちの切なる願いに拠っている。

墓地にも建築ブームの波が押し寄せた。村人たちによれば、これまで墓地には、メキシコの他の地方の多くの農村と同じように、粗末な鉄製の十字架ばかりが立っていた。しかし移民が金を運んできた。現在、墓地は都市のミニチュアのようなものだ。大きな大理石製の納骨堂が至る所に建っており、窓がついているものもあれば、ついていないものもある。納骨堂には、開いた聖書やキリスト、聖母マリアの彫像が飾られ、背の高い塔や十字架が立っている。隣接するミチョアカン州の職人たちがそれらの大理石の納骨堂を造っているのだ。「彫像をあしらった大理石の納骨堂は、築いた富を誇示する1つの手段なのだ」と、チュピクアロ村の薬剤師マルティン・カマチョは言う。

「元来チュピクアロ村の人々の間には、一種の民主主義のようなものがあります。それは、人は他のいかなる人とも同じ値打ちがあるというものです」と、サルバドル・ランヘル神父は言う。彼は公共工事のプロジェクトの多くを主催してきた司祭で、チュピクアロ村の移住者たちからプロジェクトのための資金を集めるために、カリフォルニアまで足を運んだ。「なぜ私が他人に頭を下げなければならないのかって？ 私の意見は他人の意見と同じかもしれないし、或いはもっと良いかもしれません。ある人が家を建てると、別の人はさらに豪華な家が欲しくなるものです。考えが

発展の方向へ向かうのであれば、結果的にそれは良いことだと思いますよ」

チュピクアロ村には、今まで移民がほとんど援助の対象にしてこなかったけれど、大いに影響を与えたものがある。それは学校だ。人々は宗教的なプロジェクトや祝祭には出資するが、学校を改善するためには何一つ寄付しない。「みんなはそれが政府の仕事だと思っているのです」と、ホセ・マリア・モレロス小学校の6年生の担任、フアン・フランシスコ・ソト教諭は言う。その小学校では240人の児童のうち毎年40人がアメリカ合衆国へ移住する。「移民の影響は深刻ですよ。子どもたちの多くは学問を継続する意欲を失っています。どうせ中学を終えたらアメリカ合衆国へ行ってしまおうのだと考えるのです。親たちは子どもに勉強するよう言いません。彼らは学問に意義を見出さないのです。村には医師やエンジニアがいますが、アメリカ合衆国へ移住する農民のほうが高級車を持っているのですから」

しかし教育はさておき、移住することで農夫たちに新たな一連の行動形態が萌芽していった。彼らは今、グローバル経済の先端に行く一員である。「彼らと話す、『俺は来週アメリカ合衆国へ行くんだ』と、あたかも店に買い物にでも行くように簡単に言いますよ」と、博物館館長ディエゴ・モンドラゴンは言う。彼はアメリカ合州国へは一度も行ったことが無い。「彼らには極めて自然なことなのです」そのうえ、移住と、50年前の村の強制移転から、彼らは強大な政府に抵抗するための非常にアメリカ的な方法を身につけた。例えば、チュピクアロ村と市の中心アカンバロとの関係について話すとき、彼らはアメリカ合衆国の独立のスローガン「市民に還元されない税金を許すべからず」に類似した論法で主張する。「我々がアカンバロに納めた税金で得た恩恵は何も無い」とホセ・ロペスは言う。彼はグリーンフィールドへ移住の道を拓いた人の息子で、チュピクアロ村で新鮮な青果物を輸出する会社を営んでいる。最近チュピクアロ村は、おもにアメリカ合衆国で生活している村民を中心に、アカンバロから分離独立の手続きを州政府に始めた。

それこそが、私がチュピクアロ村に見に来た変化であり、いまなお私を魅了してやまない変化なのだ。国境を挟んで両国に住むチュピクアロ村の人々と交わした会話でより顕著になったことも含めて、私は徐々にその変化に気付いていった。

初めてその兆しが現れたのは、チュピクアロ村の経済史に関する情報提供者ハイメ兄弟（ミゲルとハビエル）との会話の中だった。2人はチュピクアロ村の左官である。50年代末には、ポニファシオ・カバジェロの家を含めて村の大半の家を建てた。ハイメ兄弟が言うには、実際に建築ブームが起きたのは村が発展した60年代と70年代だった。それ以降徐々に仕事が減少した。大勢の移住者たちが年に僅か数週間しか帰郷しなくなったのだ。「[アメリカ合衆国議会が] 移民に対して特赦の法的措置を承認したとき [1986年に] 本当に仕事が無くなり始めた。翌年にはまったく無くなりしまったよ」とハビエル・ハイメは言う。「もう人々は頻繁に戻ってこなくなった。メキシコペソが1ドル3ペソから7ペソへ暴落した年 [1995年と1996年] に再び仕事の依頼を受けるようになった。人々は稼いだドルで何でもできたからね。以前ほど多くはなかったけど仕事はあったよ」

我々が話を進めるにつれて、次のことが脳裏に浮かんだ。60年代に移住した人たちは額に汗して働いて、豪華な自宅を建てるために金をつぎ込んだにもかかわらず、結局チュピクアロ村に永住帰国していない。彼らの皮肉な人生は、アメリカ合衆国に落ち着いて、チュピクアロ村を避暑地にした。それは人々が30年前に捨てたメキシコ側の体裁の良い解釈である。「メキシコ中の村々で起こっていることですよ」と、最初の会見から4年後に話したとき、移民の研究者ロペス・カストロは言った。「年配者たちは、村の家に永住のためには戻らないと決心しています」

メキシコの移住者たちは、メキシコにアメリカンドリームを実現する希望をもっていたが、かつてないほど容易に帰国できるようになった交通事情にもかかわらずそれをやめた。アメリカ合衆国で何年か暮らすうちに、移住者たちの夢は彼らの内部で無意識に変わっていった。というより、む

しろ彼ら自身が変化したのだらう。

「彼らは人生のほとんどを〔アメリカ合衆国で〕過ごすわけだし、子どもたちも向こうにいる。だからとどまるのさ」市当局に在職する村の代表ハビエル・オルベラは言う。「僕の友人たちは戻ってくるつもりでアメリカ合衆国へ行った。だけど向こうで子どもが生まれると変わるのさ。1、2週間の短期滞在は別として、15歳や20歳の息子をこっちへ連れてこようとは思わないだらう。家族に引き止められるよ。家庭はもうメキシコに無いつてことさ」

驚くべきことに、一部の移住者たちは、あれほど苦勞して建てた家を、チュピクアロ村周辺の貧しい農場からやってくる人々に売却した。このような人たちにとって、ドルが経済を支えるチュピクアロ村は、またとない好都合な土地なのだ。

チュピクアロ村の他の人たちは、2つの国籍を持って人生を送ることを考え始めている。フランシスコ・アギラルは現在、建築資材の商売を営んでいるのだが、カリフォルニア州モデストに土地を購入するためにチュピクアロ村の近くの土地を売却したがつている。おそらく彼はアメリカ合衆国の国籍を取得するだらう。今はメキシコが2重国籍を許可しているので、メキシコ人にもアメリカ人にもなれる。「あなたはアメリカ合衆国に長いこと住んでいるから、アメリカの一部のように感じているだらう」と彼は言う。「私はアメリカ合衆国の畑を見ると、まるでそこで暮らしているようだよ。追憶は人生だ。私は人生の一時期をこちらで、別の一時期をあちらで過ごしたい。いつもやっているようにね」

しかしボンファシオ・カバジェロは、メキシコ国籍をこのまま持ち続けて、末娘が高校を卒業したら愛しのチュピクアロ村に戻るつもりだと言う。彼と同じ名前の息子ボンファシオ・カバジェロにとって、帰国という両親の将来設計は、近づくにつれて益々悩みの種になっている。「いつも頭の片隅にあった。だけど考えたくないよ」と言う。「親父がイメージしている、30年前に出てきたときと同じメキシコだとは思わないよ。両親は〔毎

年] 1ヶ月帰郷するだけで、残りの期間の生活がどんなものか知らないんだ。祭りで盛り上がった村しか見ていないからね。それ以外の9ヶ月間～10ヶ月間は生気の無い廃村なのさ。もし両親が永住しに戻ったら、そこは年老いた移住者たちの終の住処なのだろう。落胆して欲しくないよ」

「素敵な考えだと思うわ。でも父が実際に戻ろうと努力しているようには見えないわ」と、ボニファシオの長女で、メリーランド州でロケットの製造に携わるエンジニアのマリア・カバジェロは言う。「父は、家族みんなが住めるように村の家に部屋を増築しているの。でも私はあそこに住めないわ。ここの便利な生活、大型店、スーパーマーケットに慣れているから。両親だけが帰国するとは思わないし。あちらで2人だけの暮らしなんて想像できない」

しかしチュピクアロ村を変えた家の建築から33年経っても、ボニファシオ・カバジェロは、2階建てのその家（サン・ペドロ通りとタラスコ通りのかど）を我が家に変えると言い張っている。彼のアメリカンドリームは元のまま変わっていない。

「女房と俺は帰国して残りの人生を満喫するつもりだよ」と言う。「はかない夢かもしれないが、俺たちは帰りたいんだ。俺はメキシコに埋葬してもらいたい。マリアッチ<sup>(4)</sup>の演奏に見送られて墓地に向かいたい。無理な頼みじゃないだろう。俺は故郷で眠りたいんだ」

1998年

---

(4) メキシコの民俗的ないし大衆的な楽団。バイオリン、ギター、ビウエラ（小型ギター）、ギタロン（大型ギター）、トランペットにより編成され、随時他の楽器が加わることもある（『ラテンアメリカを知る事典』）。